

令和元年度における県立文化施設等の個別事業評価に伴う事業の視察について

● 令和元年度 滋賀近美アートスポットプロジェクト vol.2 「Symbiosis」
(若手作家作品展示等地域交流事業)

事業内容：

滋賀県立近代美術館は、リニューアル整備に向けた長期休館に入っているが、この休館の期間を利用し、県内様々な地域で美術館の活動を展開する試みを行っている。「アートスポットプロジェクト」はその一環として、滋賀県にゆかりのある若手作家を中心に紹介するとともに、開催する地域の方と交流・協働を目指すプロジェクト。

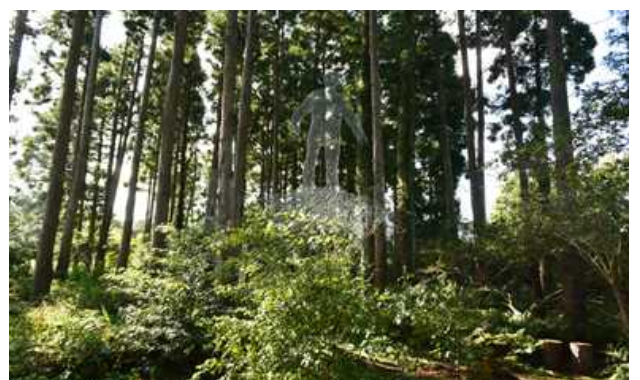
今回は、高島市安曇川町の太山寺と泰山寺という2つのエリアを横断しながら、土地と人との共生関係＝シンビオシスとそれによって形作られてきた歴史をテーマに、滋賀にゆかりのある3人の若手作家の石黒健一、井上唯、藤永覚耶の新作による展覧会を開催した。

視察日：令和元年10月16日(水)

視察先：メイン会場：田中邸長屋および周辺エリア（高島市安曇川町田中 4915）

サブ会場：山里暮らし工房 風結い モデルハウス（高島市安曇川町中野 795）

出席委員：井上委員、片山委員、吉田委員



● ホスピタルコンサート

事業内容：

病院や福祉施設等を会場に本県出身の新進演奏家やびわ湖ホール声楽アンサンブルのメンバーによるコンサートを開催する。病気療養中の方や高齢者など、様々な理由で生の音楽に触れる機会の少ない方に心穏やかな時間を過ごしていただく機会を提供するとともに、本県の音楽文化の一層の振興を図る。

クラシック音楽を中心に童謡、映画音楽、季節の歌など耳馴染みのある楽曲を交えた30分程度のコンサートとし、びわ湖芸術文化財団主催「湖国新進アーティストによる演奏会〜ザ・ファーストリサイタル〜」出演者による公演を行った。

会場：友仁山崎病院 1F 総合受付フロア（彦根市竹ヶ鼻町 80）

視察日：令和元年10月31日（木）

出席委員：上田委員、井上委員、中川部会長

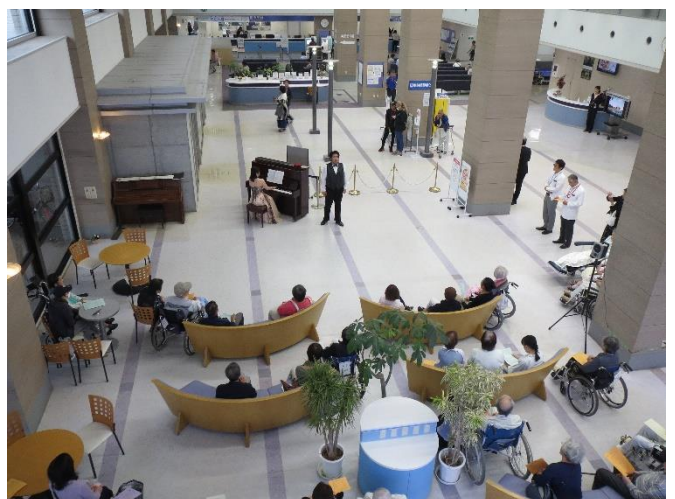


開催風景

(1) 令和元年10月2日(水) ひかり病院(大津市際川 3-35-1)



(2) 令和元年10月8日(火) 草津総合病院(草津市矢橋町 1660)



(3) 令和元年10月31日(木) 友仁山崎病院(彦根市竹ヶ鼻町 80)



開催風景

(4) 令和元年11月10日(日) 養護老人ホームながはま (長浜市加田町19-6)





ホスピタルコンサート

日時 令和元年10月2日（水）

12：50 開演

会場 ひかり病院 1 階外来ロビー

出演 フルート：青木 浅間

フルート：吉延 佑里子

演奏プログラム（予定）

1. 2本のフルートのためのアレグロ L.v.ベートーヴェン
2. 「魔笛」より抜粋 W.A.モーツァルト
3. カルメン前奏曲 G. ビゼー
4. ちいさい秋みつけた 中田喜直
5. 赤とんぼ 山田耕柝
6. タヤけ小やけ 草川信
7. アメイジンググレイス 讃美歌
8. エーデルワイス R.ロジャース
9. きらきら星変奏曲 W.A.モーツァルト
10. 見上げてごらん夜の星を いずみたく
11. 琵琶湖周航の歌 吉田千秋

主催：（公財）びわ湖芸術文化財団（滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール）

協力：滋賀県病院協会、ひかり病院、（社福）グロー



文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

奏者◆プロフィール



♪ ^{あおき}青木 ^{あさみ}浅間 ♪

東京都出身。12歳よりフルートをはじめる。

京都市立芸術大学を卒業。

第6回中学生管打楽器コンクールにて優秀賞、第18回ブルクハルト国際コンクールにて奨励賞を受賞。

現在、各地で訪問演奏をするほか、室内楽、オーケストラなど演奏活動を活発に行なっている。

フルートをこれまでに 中村たか子、齋藤真由美、大嶋義実、富久田治彦、瀬尾和紀の各氏に師事。

♪ ^{よしのぶ}吉延 ^{ゆりこ}佑里子 ♪

滋賀県草津市出身。12歳よりフルートをはじめる。滋賀県立石山高等学校音楽科を経て、京都市立芸術大学を卒業。卒業に際して京都市長賞を受賞。

（公財）びわ湖芸術文化財団主催《ザ・ファーストリサイタル2017》にオーディションを経て出演。

現在、ソロやオーケストラ等の演奏活動のほか、音楽教室などで後進の指導にもあたっている。また、ピアノの榎山さやか氏と共に《Lapin》としても活動中。

これまでに、竹林秀憲、大嶋義実、富久田治彦、伊藤公一の各氏に師事。



ホスピタルコンサート

日時 令和元年10月8日(火)

14:00 開演

会場 草津総合病院 1階 エントランスホール

出演 ソプラノ：飯嶋 幸子

テノール：島影 聖人

ピアノ：小林 千夏

演奏プログラム(予定)

- 乾杯の歌
オペラ「椿姫」より G.ヴェルディ
- 優しいあの子
NHK 朝ドラ「なつぞら」オープニング 草野正宗
- Stand Alone
ドラマ「坂の上の雲」のメインテーマ 久石譲
- オー・ソレ・ミオ E.ディ・カプア
- ふるさとの四季より抜粋 源田俊一郎
- 赤とんぼ 山田耕筰
- Time to Say Goodbye F.サルトーリ

主催：(公財)びわ湖芸術文化財団(滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール)
協力：滋賀県病院協会、草津総合病院、(社福)グロー



文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

赤とんぼ
詞：三木露風
曲：山田耕筰
夕焼け小焼けの 赤とんぼ
負われて見たのは
いつの日か
山の畑の 桑の実を
小かごに摘んだは
まぼろしか
十五でねえやは 嫁に行き
お里の 便りも
絶え果てた
夕焼け小焼けの 赤とんぼ
とまっているよ
竿の先

奏者◆プロフィール

ソプラノ 飯嶋 幸子

武蔵野音楽大学大学院修了。ロベルト・シューマン音楽コンクール第3位。奏楽堂日本歌曲コンクール入選。二期会オペラ研修所マスタークラス修了。修了時に優秀賞受賞。正確な歌唱と多彩な演技力に定評がある。オペラでは『フィガロの結婚』スザンナ、『ドン・ジョヴァンニ』ドンナ・アンナ、『コジ・ファン・トゥッテ』デスビーナ、『ルサルカ』タイトルロール、『天国と地獄』ユーリディス、『連隊の娘』マリー、『ヘンゼルとグレーテル』グレーテル等を演じる。宗教曲では、フォーレ『レクイエム』のソリストを務める。岩谷真由実、河野めぐみの各氏に師事。二期会会員。

テノール 島影 聖人

大阪音楽大学卒業、同大学音楽専攻科声楽専攻修了。韓国・テグオペラハウス『蝶々夫人』ピンカートン役で出演。他『ドン・ジョヴァンニ』ドン・オッターヴィオ、『コジ・ファン・トゥッテ』フェランド、『ラ・ボエーム』ロドルフォ、『愛の妙薬』ネモリーノ、『椿姫』ガストーネ、『こうもり』アルフレード、『ヘンゼルとグレーテル』魔女、『森は生きている』11月・兵士、『ホフマン物語』スパンツァーニ、ナタナエル、『泣いた赤鬼』赤おに、『ルサルカ』魔女、『フィガロの結婚』バジリオ等を演じる。他にも『第九』等のソリストを務める。びわ湖ホール声楽アンサンブル・ソロ登録メンバー。上方オペラ工房メンバー。大阪音楽大学演奏員。

ピアノ 小林 千夏

滋賀県立石山高等学校を経て、京都市立芸術大学音楽学部卒業。第15、16、21回滋賀県ピアノコンクール第1位及び知事賞(第15回)。PTNAピアノコンペティション西日本京都デュオ大会第1位及び読者賞。長江杯国際音楽コンクール第3位。第7回滋賀県新人演奏会にて部門優秀賞及び最優秀賞。第23回和歌山音楽コンクール優秀伴奏者賞。平成21年度平和堂財団芸術奨励賞(音楽部門)受賞。ピアノを井上宏子、松下純子、椿久美子、田隅靖子、神谷郁代の各氏に師事。現在、ソロをはじめ伴奏、室内楽等で幅広く演奏活動を行っている。ムジカA国際音楽協会会員。



ホスピタルコンサート

日時 令和元年10月31日（木）

14:00 開演

会場 友仁山崎病院 1 階 総合受付フロア

出演 ソプラノ：中西 恵子

ピアノ：岩田 瑠奈

演奏プログラム（予定）

1. 紅葉 作詞：高野辰之 作曲：岡野貞一
2. 赤トンボ 作詞：三木露風 作曲：山田耕筰
3. ミカンの花咲く丘 作詞：加藤省吾 作曲：海沼実
4. 里の秋 作詞：斎藤信夫 作曲：海沼実
5. リンゴの唄 作詞：サトウハチロー 作曲：万城目正
6. 青い山脈 作詞：西條八十 作曲：服部良一
7. 上を向いて歩こう 作詞：永六輔 作曲：中村八大
8. 幸せなら手をたたこう アメリカ民謡
9. 涙そうそう 作詞：森山良子 作曲：BEGIN
10. 花 ～すべての人の心に花を～ 作詞作曲：喜納昌吉
11. オー・ソレ・ミオ 作詞：G.カプッロ 作曲：E.ディ・カプア
12. また逢う日まで 作詞：阿久悠 作曲：筒美京平

主催：（公財）びわ湖芸術文化財団（滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール）
協力：滋賀県病院協会、友仁山崎病院、（社福）グロー



文化庁文化芸術振興費補助金（劇場・音楽堂等機能強化推進事業）
独立行政法人日本芸術文化振興会

奏者◆プロフィール

♪ ^{なかにし けいこ} 中西 恵子 ♪

滋賀県甲賀市出身。滋賀県立石山高等学校音楽科、同志社女子大学学芸学部音楽学科演奏専攻声楽コース卒業。東京音楽大学大学院オペラ研究領域修了。第53回なにわ芸術祭新進音楽家共演会にて新人賞（最高位）、大阪府知事賞、他受賞。第9回東京国際声楽コンクール歌曲部門第4位、第4回豊中音楽コンクール一般声楽の部第1位受賞。第30回宝塚ベガ音楽コンクール入選。2014,2016年ウィーン国立音楽大学 isa サマーアカデミーマスタークラス、2015,2017年モーツァルトウム音楽大学サマーアカデミーマスタークラスに参加、ディプロマ取得。現在、日本シューベルト協会、東京二期会会員。

♪ ^{いわた るな} 岩田 瑠奈 ♪

名古屋市立菊里高等学校音楽科卒業後、渡独。ミュンヘン音楽演劇大学ピアノ科卒業。2014年、同大学大学院リート科ピアノ専攻を修了後、帰国。クールシュヴェール夏期国際音楽アカデミー、ミュンヘン国際音楽セミナー他、イタリア・モンテプルチャーノにて歌曲解釈マスタークラスを受講し研鑽を積む。現在、声楽・器楽伴奏を中心に精力的に活動する傍ら、後進の指導にもあたっている。大阪芸術大学伴奏要員。





ホスピタルコンサート

日時 令和元年11月10日(日)

14:00 開演

会場 (社福) グロー 養護老人ホームながはま

出演 ソプラノ: 脇阪 法子

ピアノ: 小林 朱音

演奏プログラム(予定)

1. 踊り明かそう(映画「マイ・フェア・レディ」より)
..... 作詞: A.J.ライナー 作曲: F.ロウ
2. オランピアのアリア「生け垣に小鳥たちが」(歌劇「ホフマン物語」より)
..... J.オッフエンバック
3. ガヴォット(「ホルベア組曲」より) E.グリーグ
4. 上を向いて歩こう 作詞: 永六輔 作曲: 中村八大
5. 心の瞳 作詞: 荒木とよひさ 作曲: 三木たかし
6. 四季のうた 作詞作曲: 荒木とよひさ
7. ちいさい秋みつけた 作詞: サトウハチロー 作曲: 中田喜直
8. やきいもぐーちーぱー 作詞: 阪田寛夫 作曲: 山本直純
9. ふるさと 作詞: 高野辰之 作曲: 岡野貞一
10. コン・テ・パルティロ 作詞: L.クアラントット 作曲: F.サルトーリ
11. 琵琶湖周航の歌 作詞: 小口太郎 作曲: 吉田千秋

主催: (公財)びわ湖芸術文化財団(滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール)

協力: 滋賀県病院協会、(社福) グロー 養護老人ホームながはま



文化庁文化芸術振興費補助金(劇場・音楽堂等機能強化推進事業)
独立行政法人日本芸術文化振興会

奏者◆プロフィール

脇阪 法子

滋賀県立虎姫高等学校を経て大阪音楽大学卒業。卒業時最優秀賞受賞。滋賀大学大学院教育学研究科修了。第14回滋賀県新人演奏会にて全部門より最優秀賞受賞。滋賀県芸術文化祭奨励賞受賞。第4回豊中音楽コンクール第3位、第6回あおによし音楽コンクール第1位。オペラでは「オリンピアデ」アリステア役、「カルメン」フラスキータ役、「魔笛」パパゲーナ役等出演。4度のジョイントリサイタルの出演、第九ソリスト他、様々なオペラやコンサートに出演。関西歌劇団正団員。

小林 朱音

滋賀県長浜市出身。

大垣女子短期大学音楽総合科ピアノ専攻卒業。同短大定期・卒業各演奏会、ロビーコンサート、大垣音楽祭、水嶺湖音楽祭等に出演。

また在学中より幼稚園や学校、病院、施設などへのアウトリーチコンサートを数多く行う他、大垣市制100周年事業に携わるなど様々な音楽家やダンサーと共演。

「くるみ割り人形」「白鳥の湖」では編曲も手がけ、バレエアカデミーと共演、好評を博す。ピアノを横井香織、故河村義子各氏に師事。



○評価部会委員による外部評価

事業名:「滋賀近美アートスポットプロジェクトVol2.Symbiosis」

(令和元年10月16日(水)実施)

重点施策4:若手芸術家等の育成・支援

評価すべき点	若手作家の活躍の場の確保というコンセプトが明確な点、学芸員が場所・会場の面白さ、地域の歴史の深み、市井の人々の魅力を丹念にリサーチし、作家の力をうまく引き出している点を評価したい。
	学芸員が若手作家と密なコミュニケーションをとることで、地域と深く関係を持った良き創造環境をつくりだしている点は高く評価できる。また、美術館再開館後にこうした作家に活躍の機会を提供する予定となっている点も、1回限りの関係に終わらない、継続的な関係が美術館と若手作家の間に構築されるという点で高く評価できる。
	美術館というある意味制約の多い表現空間ではないところで、若手の作家がある程度自由に、創作活動を地域の方やキュレーターと一緒に行うことができたように思えますし、私自身が、純粋に展示空間を作家の方と作品を通じて共有でき、楽しかったと感じましたし、実際に、鑑賞された方々の満足度が高かったことからこう言えるのではないかと思います。
改善が必要な点	若手作家の活躍の場の確保から、一歩踏み込んで、若手作家の育成を掲げてよいのではないか。
	チラシに学芸員の氏名を明記して、学芸員のキュレーションをアピールするなど、若手学芸員の育成という視点もあってよい。
	学芸員の方には、作品の批評に積極的に取り組み、作家や作品に付加価値をつける努力を惜しまないでほしい。それが、若手作家らの次のステージにつながるからだ。
	作家の発掘、選定は学芸員の個人的な能力に委ねられているように見受けられたが、今後は美術館として組織的に行える体制が築けると、より幅広い人材発掘が継続的に行えるようになるものと思われる。
	夏から秋にかけては全国で多くの芸術イベントが行われる時期ではあるが、専門家や専門雑誌等に注目してもらうための取り組みを、館としてももう少し強化しても良いものと思われる。
	全部の作家、全部の作品ではありませんが、鑑賞の入り口までちゃんと導く工夫が少し欠けていたものがあつたと感じました。既存の安定した分野ではない、現代アートの世界なので理屈は良いから感覚、感じるということを重視するということについて、ある程度理解はするのですが「わからない人はそれでよい」というような姿勢は全くなかったと言えるでしょうか。キュレーターに求められるもの、鑑賞者がキュレーターに求めるものをもう一度見つめていただきたいと思います。

重点施策7:「美の滋賀」づくりの推進

<p>評価すべき点</p>	<p>美術館が地域アートに関わることで、コンセプトが明確で、洗練された展覧会となっている。</p> <p>地域の歴史や資源を現代の作家の創作活動を通して、発信できていることは「美の滋賀」づくりに大きく貢献する事業として評価できる。作家、地元、学芸員の3者がしっかりとコミュニケーションをとり、連携できていることはこうした取り組みとしては理想的なかたちができているものとして高く評価できる。</p> <p>交通面や地理的な理由から、それほど多くの来場者は望めないものの、美術館再開館後に記録を出版物化する予定であることは今後につながるものとして評価できる。</p> <p>あの空間でこそ表現できたのであらうと思われる、まさに、場を生かし、構成された表現の場を共有し、地元の方もそれを愉しんでいただけの方がおられたことは、美術作品の鑑賞＝美術館ではなく、そもそも芸術作品はどこに於いて創作鑑賞されるものなのかを再認識させてくれる体験でした。</p>
<p>改善が必要な点</p>	<p>アートと社会をつなぐのが学芸員の仕事である。若手の学芸員が多いと聞いた。チラシに学芸員の氏名を明記して、学芸員のキュレーションをアピールするなど、学芸員の顔が見え、彼らの名前でお客さんと呼べるような美術館を目指してほしい。</p> <p>地域アートを美術館が展開することで、アーカイブができていない、評価が十分されていないなど地域アートが抱える課題を克服するポテンシャルがある。地域アートの作品のコレクションの検討や、作品やプロジェクトの批評に積極的に取り組んでいただきたい。</p> <p>県内在住の評価委員の指摘等によれば、県内での認知度は必ずしも高くなってはいないようであるので、地元広報を強化する必要がある。アンケート調査の結果をみても、来場者の8割以上は滋賀近美を知っており、6割以上は来場経験のある人となっており、必ずしも新規の層を開拓できているとは言えない。</p> <p>今回のプロジェクトに関しては、自然の中ということで生きた創作・鑑賞だったことは間違いないと思われますが、そもそも、美術館という場がない状況下で県民に対してサービスを提供するに際して、年に一度、制約がある中で実施するものとしてあの場所が本当にベストだったのかということはしっかりと問うべきだと思います。入場者数の設定目標も1,500人というのが適切な数値だったのでしょうか。美術館が休館しているという事実を踏まえて、求められている、提供すべき行政サービスをもう一度考えていただければと思います。</p>

総評:

<p>評価すべき点</p>	<p>地域活性化を漠然と掲げ、中途半端な成果しかあげられない地域アートが少なくないなかで、若手作家の活動の場の確保という旗印を明確にし、実際に若手芸術家の力を引き出し、成果を挙げようとしている点を高く評価したい。 作家も学芸員も、若者であるがゆえの手抜きが一切ない、かつ、今後の展開や発展可能性が垣間見える素晴らしい展覧会だった。</p> <hr/> <p>当事業は、目的である若手作家に対する支援として大きな成果が期待できる内容となっている点で評価できる。財政的制約から、公立美術館がコレクションを拡充することは困難になってくる中で、今後の公立美術館のあり方として、若手作家とのつながりを強化していくことは意義のあることと言える。</p> <hr/> <p>滋賀県というものが持っている資源を有効に活用して、プロジェクトを実施し、鑑賞者もある程度楽しめる空間を作家、作品と共有し、「美の滋賀」のコンセプトに沿った企画で、県外からの観覧者の比率もそれなりに高かったことは、滋賀の県外への発信という面からは、よかったと思われます。</p>
<p>改善が必要な点</p>	<p>美術館と地域アートの連携のモデルを作り、新美術館の柱の一つにしてほしい。</p> <hr/> <p>広報面の取り組みを、美術館として組織的に展開できるとより大きな成果が得られるようになるものと思われる。</p> <hr/> <p>県民の皆さんは、県立美術館が長く休館したままで、何かごたごたもめているようだというような印象を持っておられるという中で、行政サービスを提供しているということを本当に念頭において今回のプロジェクトを行っていたかを見つめ直していただけたらと思います。芸術として「良いもの」を提供してればよいということになっていないか。鑑賞者の満足感が概ね高かったということだったからこそ、あえてお考えいただければと書かせていただきました。</p>

個別事業評価にかかる対応について

事業名:「滋賀近美アートのスポットプロジェクトVol.2 Symbiosis」 視察日: 令和元年10月16日(水)

重点施策4: 若手芸術家等の育成・支援

評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
若手作家の活躍の場の確保から、一歩踏み込んで、若手作家の育成を掲げてよいのではないか。	本プロジェクトは単に若手作家の作品を紹介するのみならず、担当学芸員のコーディネートのもと設定されたテーマや会場を踏まえ、若手作家が地域関係者や他の出展作家とも関わりながら新たな作品を制作し展覧会を作り上げていくものである。実質的に作家の育成に寄与していると思われ、今後もそういった面を重視しながら事業を展開していきたい。
チラシに学芸員の氏名を明記して、学芸員のキュレーションをアピールするなど、若手学芸員の育成という視点もあってよい。	本プロジェクトをはじめ、美術館が独自企画で展覧会等を実施する際には、学芸員の視点や企画力が問われることから、誰が担当しているのかは来場者にとっても重要な情報であり、今後、名前を出すことについても積極的に考えてきたい。
学芸員の方には、作品の批評に積極的に取り組み、作家や作品に付加価値をつける努力を惜しまないでほしい。それが、若手作家らの次のステージにつながるからだ。	ご指摘の点は、美術館が果たすべき重要な使命の一つであると捉えている。本プロジェクトでも次のステップとして、令和3年度を予定している美術館再開館時の展覧会で出展作家の作品を改めて展示するほか、カタログを発行することなどを通じて、その使命をより果たせるようにしていく予定である。
作家の発掘、選定は学芸員の個人的な能力に委ねられているように見受けられたが、今後は美術館として組織的に行える体制が築けると、より幅広い人材発掘が継続的に行えるようになるものと思われる。	作家の選定そのものは、展示を成立させる企画者である学芸員に一定委ねるべき側面があると考えるが、その前段として、日ごろから美術館が組織として様々な作家の活動をリサーチし、関わりを持つことで情報を蓄積し、その中から学芸員が出展作家を選定すること等を通じて、継続的な人材発掘につなげる必要がある。
夏から秋にかけては全国で多くの芸術イベントが行われる時期ではあるが、専門家や専門雑誌等に注目してもらうための取り組みを、館としてもう少し強化しても良いものと思われる。	現在、当館には広報担当者が実質的に存在せず、プロモーションやパブリシティが十分でない側面があるため、今後令和3年度の再開館に向けて、充実・強化を図っていきたい。
全部の作家、全部の作品ではないが、鑑賞の入り口までちゃんと導く工夫が少し欠けていたものがあつたと感じた。既存の安定した分野ではない、現代アートの世界なので理屈は良いから感覚、感じるということを重視することについて、ある程度理解はするのですが「わからない人はそれでよい」というような姿勢は全くなかったと言えるか。 キュレーターに求められるもの、鑑賞者がキュレーターに求めるものをもう一度見つめるべきだと感じた。	展覧会や作家・作品の意図や情報等の説明、紹介の手法については、展覧会のコンセプトによっても異なる。本プロジェクトも昨年度は会場にかなりのテキストを掲示する手法を取り、今年度はテキストの掲示は控えめにしつつ、来場者に配布する印刷物を用意するとともに、できる限り会場に学芸員が常駐し、コミュニケーションを取りながら説明することをメインとした。会場により来場者の質も異なるため、手法は様々であるが、できるだけ多くの方に作品を楽しんでいただくことができるよう、来年度以降もその会場、展示においてベストと思われる方法を検討したい。

重点施策7:「美の滋賀」づくりの推進

評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
アートと社会をつなぐのが学芸員の仕事である。若手の学芸員が多いと聞いた。チラシに学芸員の氏名を明記して、学芸員のキュレーションをアピールするなど、学芸員の顔が見え、彼らの名前でお客さんと呼べるような美術館を目指してほしい。	本プロジェクトをはじめ、美術館が独自企画で展覧会等を実施する際には、学芸員の視点や企画力が問われることから、誰が担当しているのかは来場者にとっても重要な情報であり、今後、名前を出すことについても積極的に考えてきたい。美術館の3要素は、ハコ、モノ、ヒトであるが、ハコの休館中に「月刊学芸員」という講座を新たに始めたところ。今後もヒト(学芸員)の活用と発信に取り組む方針である。
地域アートを美術館が展開することで、アーカイブができていない、評価が十分されていないなど地域アートが抱える課題を克服するポテンシャルがある。地域アートの作品のコレクションの検討や、作品やプロジェクトの批評に積極的に取り組んでいただきたい。	(再掲)ご指摘の点は、美術館が果たすべき重要な使命の一つであると捉えている。本プロジェクトでも次のステップとして、令和3年度を予定している美術館再開館時の展覧会で出展作家の作品を改めて展示するほか、カタログを発行することなどを通じて、その使命をより果たせるようにしていく予定である。
県内在住の評価委員の指摘等によれば、県内での認知度は必ずしも高くなってはいないようであるので、地元広報を強化する必要がある。アンケート調査の結果をみても、来場者の8割以上は滋賀近美を知っており、6割以上は来場経験のある人となっており、必ずしも新規の層を開拓できているとは言えない。	今回のプロジェクトでは、ローカルネットメディアの活用など新たな情報発信の手法にも取り組んだところであるが、これまで美術に対する関心が薄く、近代美術館に来館経験が無い方へのさらなる効果的なアプローチについて検討したい。 また、本プロジェクトに来場していただいた方、特にこれまで来館経験が無い方に、再開館後の美術館にできるだけ来館してもらえるよう取り組む必要がある。
今回のプロジェクトに関しては、自然の中ということで生きた創作・鑑賞だったことは間違いないと思うが、そもそも、美術館という場がない状況下で県民に対してサービスを提供するに際して、年に一度、制約がある中で実施するものとしてあの場所が本当にベストだったのかをしっかりと問うべきだと思う。	長期休館中の活動としては本プロジェクトのほかに、主に館のコレクションを活用した展覧会を開催する「県内移動展示事業」や、県内各地の学校や施設で講座・ワークショップを行う「地域連携プログラム」など、美術館のリソースを活用して様々な観点の取組を行っている。そういった中で本プロジェクトは、普段美術館へのアクセスが困難な遠隔地で、若手作家への支援、土地の自然や生活との接続性、地域の方との交流・協働の促進の側面を重視して選択したものである。今後さらに、事業ごとの目的や対象者を的確に捉えながら、適切な会場の選定に留意したい。
入場者数の設定目標の1,500人が適切な数値だったのか。	前項のとおり、事業の目的に鑑みて、今回は敢えて圏域人口の少ない湖西エリアの山間部で開催した側面があるが、そういった中でも今後、できるだけ多くの来場者を確保できるよう、努めていきたい。また、直接来場していない人を含めて事業の成果を波及させることができるよう、今後、事業の概要をアーカイブしたカタログを発行するとともに、再開館後には各地域での取組を総括する展覧会の開催を予定している。
美術館が休館しているという事実を踏まえて、求められている、提供すべき行政サービスをもう一度考えるべきだと思う。	長期休館中の活動としては本プロジェクトのほかに、主に館のコレクションを活用した展覧会を開催する「県内移動展示事業」や、県内各地の学校や施設で講座・ワークショップを行う「地域連携プログラム」などを展開している。そうした中で本プロジェクトは、普段美術館へのアクセスが困難な遠隔地で、若手作家への支援、土地の自然や生活との接続性、地域の方との交流・協働の促進の側面を重視して実施しているものである。今後も、美術館に求められる社会的な役割を絶えず意識し、館のリソースを活用して様々な観点の取組を展開していく必要がある。

総評

評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
美術館と地域アートの連携のモデルを作り、新美術館の柱の一つにしていきたい。	再開館後も本プロジェクトを継続していったほしいという声も多くいただっており、滋賀の文化的資源とアートとの融合や地域との双方向の係性を構築しようする「美の滋賀」の拠点をめざす本美術館として、何らかの形で今後も継続的に実施できる方策を検討したい。
広報面の取り組みを、美術館として組織的に展開できるとより大きな成果が得られるようになるものと思われる。	(再掲)現在、当館には広報担当者が実質的に存在せず、プロモーションやパブリシティが十分でない側面があるため、今後令和3年度の再開館に向けて、充実・強化を図っていきたい。
県立美術館が長く休館したままで、何かごたごたもめているようだというような印象持たれている中で、行政サービスを提供しているということを本当に念頭において今回のプロジェクトを行っていたかを見つめ直すべき。芸術として「良いもの」を提供してればよいということになっていないか。	(再掲)長期休館中の活動としては本プロジェクトのほかに、主に館のコレクションを活用した展覧会を開催する「県内移動展示事業」や、県内各地の学校や施設で講座・ワークショップを行う「地域連携プログラム」などを展開している。そうした中で本プロジェクトは、普段美術館へのアクセスが困難な遠隔地で、若手作家への支援、土地の自然や生活との接続性、地域の方との交流・協働の促進の側面を重視して実施しているものである。今後も、美術館に求められる社会的な役割を絶えず意識し、館のリソースを活用して様々な観点の取組を展開していく必要がある。

○評価部会委員による外部評価

事業名：ホスピタルコンサート(令和元年10月31日(木)実施)

重点施策4：若手芸術家等の育成・支援

評価すべき点	若手芸術家の登場場面として、音響照明、その他が十分ではないものの、力量に直接反応を得られる厳しい場でもあると思う。にも関わらず、ひたむきな演奏、歌唱が好感を呼んだと思う。
	普段と違い、半分は制御の効かない、しかも機材や設備上制約の多い環境そして(傷病のために一貫して無反応という聴衆もいると思うが)そうした無反応という反応も含めての雰囲気の中で、で演奏を行うことは、「現場力」あるいは「現場合わせの力」をつける上では良いと思う。
	患者や高齢者だけでなく、付添人や看護者が場を盛り上げたり掛け声をかけたり時には「媒介者」「翻訳者」となって患者や高齢者と芸術家・芸術の間を取り持つ、というような機会も、そんなに頻繁にあることではないと思うので、演奏家の取り組み方次第で、芸術の力とか役割について考えを深める機会にもなり得るのではないかなと思う。
	演奏家の方にとっても、ホールなどの通常のコンサート会場ではない場所で、音響等の環境も整わないところでの演奏を行うことはよい経験になったのではないかなと思います。このような環境に居ざるを得ない方にとっての芸術とは何か、芸術とはだれのためのものかを、改めて見つめ直していただけたのではなかったでしょうか。
改善が必要な点	病院の玄関脇ホールであっても事前の調整はやはり念入りにしておくべきであり、演奏者の熱意を挫いてはならない。今回はうまくいったと思うが、条件が同じとは限らない。
	対象者の状況や属性を踏まえて、また、親しみやすさや聞きなれているかどうか、ということを勘案しての選曲かと思うが、曲目に限って言うと、近所の老人ホームや町内の敬老会での「慰問」と変わらないものであったともいえる。その安心感も必要と思うし、それが求められていたのかもしれないが、芸術・文化、音楽の力、ということを踏まえた工夫(キュレーション)があるのも良いのではないかな。例えば、傷病とのかかわりにおいて成立した曲とか、作曲者本人の傷病や生涯を契機に成立した曲、あるいは(それは音楽や芸術本来の役割ではないかもしれないけれど)音楽・楽曲と治癒的効果などを盛り込んだ、病院という場ならではのものも、プロであればこそ可能ではないかな。そうしたことを通じて、若手芸術家の企画・提案力などを育む場にもできるのではないかな。
	このような場所でのコンサートだからこそ、地元で活動しているアーティストによる演奏の方がよかったのではないのでしょうか。やはり、事前に一度は会場を訪れ、イメージを描いた上で準備を行う方がよいと思います。

重点施策9:文化活動の環境の整備

<p>評価すべき点</p>	<p>病院や福祉施設こそ、芸術供給が必要な場所であり、それを着実に実践する行政と財団であることを県民に示したことに大変意義がある。</p> <p>本事業で提供している時間・機会は、入院している患者や入所している高齢者当人にとって価値ある時間・体験であることと同時に、芸術が現出させる通常と違う時間や場を提供するということは、場合によっては、患者・高齢者以上に、患者や高齢者に寄り添う看護者・介助者や家族にとっての、ひとときの癒しや楽しみ、あるいはときには救いの時間や場にもなり得のかもしれない、そうした観点から見ると、位置づけの仕方や組み立て方によっては、大変重要な事業になりうると感じた。</p> <p>病院によってはこうしたコンサートなどのイベントが近隣住民と病院とを普段からつなぐ機会として機能しているということで、コミュニティーの一拠点でありコモンズのひとつでもある病院の機能を広げ、市民相互の心の交流を媒介するという意味で、文化芸術の力が発揮させ得る事業であると感じる。</p> <p>病院や福祉施設、学校や被災地など、そのような環境にいるからこそ文化や芸術の持つ意味、その素晴らしさを再認識できる場所、場面はあり、また、演奏時間も程よかったかなと思います。</p>
<p>改善が必要な点</p>	<p>今後、どのような医療、福祉施設にアウトリーチしていくのか、その条件や方向性を来場者にもPRしていくべきではないだろうか。口コミの力は大きいからだ。</p> <p>重点施策4に関連して、癒しとケアが必要で、文化や芸術に触れられる余暇や隙間を求めているのは、患者や被介護者だけでなく、患者の家族をはじめとする看護者や介護者もそうであり、時には彼らにこそより切実にそれが求められているかもしれない。そうした観点から例えばあえて看護者・介護者をターゲットとするような企画・構成もありうるのではないかな。</p> <p>演奏によって患者・高齢者に癒しと慰めを与えることに加えて、「元気になり、退院し、あるいはその機会が来たら、今度はびわ湖ホールで、〇〇の会場でもう一度聞きたい・見たいな」、という目標や憧れ、その種を心に植え付けたり、そのように誘う工夫ができないか。一枚のパネル写真や旗印でも良いが、例えば、それがあすることで、びわ湖ホール等劇場や舞台をほうふつとさせるような(能舞台鏡板の松のような、祭りの庭に立てられる御幣や榊のような)シンボリックな、かつ持ち運びに簡便な、事業共通のしつらえのちょっとした小道具。そんなものはないかな。</p> <p>プログラムの選定が、病院ということでステレオタイプになっていなかったでしょうか。ご年配の方が多いため、歌謡曲、懐メロなのかということは再考すべきではないでしょうか。また、テレビ画面の字は少し小さく、字を追っていくことはご病気の方にはちょっとしんどかったと想像されるのですが。</p>

総評:

<p>評価すべき点</p>	<p>「豊かさ」や「ゆとり」があってこそ「文化・芸術」という誤った前提、たるんだイメージを覆す営みとして大きな意義がある。</p> <p>従来に比べて、病院という場が地域においてそのコミュニティの拠点として担う役割も大きくなる中、人と人をつなぐ機会となり得るという点で可能性がある。また、傷病を負った患者が治療を受け、治癒していくという、病院本来の機能の中で、そういう場でありながらケアされずに疲弊していく家族をはじめとする介護者や付き添い者の人と機のサプリメントとしての意義や効果もあると考えられ、アートとケアの関りやその可能性の観点から、工夫次第で発展の余地のある事業でもあると感じる。</p> <p>ホスピタルコンサートは、演奏家にとっても、聴衆にとってもメリットがあり、条件等の面に種々の制約はあるとは思われますが、是非拡大して、続けていっていただけたらと思います。</p>
<p>改善が必要な点</p>	<p>もっともっと実施回数と場所を増やし、広げるべき。まだまだ少な過ぎる。</p> <p>今回はたまたまクラシック音楽ではなく童謡や歌謡曲中心の選曲であったこと等もあって、「(「不幸な人や苦勞している人などを)見舞って慰めること」という意味での)いわゆる「慰問」的な「におい」を感じた。「慰問」自体悪いことではなく、またあえて当事業を娯上にあげて議論すべきことかわからない。また当事業がそもそも「慰問」を目的とするものであるならこうした見方は的外れかもしれない。「慰問」の場で感じるような空気、すなわち、芸術家と芸術に触れるというよりは、演者、患者・入所者、介助者・スタッフ・主催者が三位一体となってつくる予定調和的な、安心に満ちた場や雰囲気味わえればそれでよく、それが必要だろうと思う反面、むしろ若手の人たちほど、こうしたイベント、あるいは高齢者や患者というものに対するステレオタイプなイメージにとらわれてしまって惜しいことをしているところもあるのではないかと感じるし、ときに患者や入所者を「子どもあつかい」しているかのように見えることもある(今回イベントでのことではなく一般論として)。「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」と言った糸賀一男の観点到立った時に、病院という場で(タテに主従あるサービスとしてではなくヨコに対等なホスピタリティとしての)ホスピタルコンサートとは、どのようなものでありうるか。単に「慰問」を超えた、あるいは「慰問」の新しいかたちとしての事業になりうるか。以上のようなことについて、若い芸術家の方々と議論してみたいし、芸術家の方々同士や芸術家と病院・施設や患者・スタッフの間で議論されると面白いのではないかと思います。</p> <p>演奏する曲の選定、演奏家の選定についてはしっかりと検討の上、決定し、実施していただけたらと思います。限られた時間の中ですので、100パーセントすべての方に満足していただくことは難しいにしても、「病院だから、病人だから」という思い込みを一旦リセットしてお考えいただけたらと思います。また、入場者数の目標設定はどこから導き出されたのでしょうか。達成度175パーセントというのも手放しでよかったといえるのでしょうか。会場は本当に、病院内に、あの場所しかなかったのでしょうか。</p>

個別事業評価にかかる対応について

事業名: ホスピタルコンサート

視察日: 令和元年10月31日(木)

重点施策4: 若手芸術家等の育成・支援

評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
病院の玄関脇ホールであっても事前の調整はやはり念入りにしておくべきであり、演奏者の熱意を挫いてはならない。今回はうまくいったと思うが、条件が同じとは限らない。	今回の会場については、全4会場のうちもっともスペースの狭いコンサート会場となり、下見の際に過去に演奏された方のお話や状況を伺いました。その上で病院と相談をし、会場を決定し細かい情報を演奏者にも適宜お伝えしています。今後も演奏者と事前に十分調整を行い、奏者の思いも踏まえたコンサートとなるよう努めます。
対象者の状況や属性を踏まえて、また、親しみやすさや聞きなれているかどうか、ということをお案しての選曲かと思うが、曲目に限って言うと、近所の老人ホームや町内の敬老会での「慰問」と変わらないものであったともいえる。その安心感も必要と思うし、それが求められていたのかもしれないが、芸術・文化、音楽の力、ということを踏まえた工夫(キュレーション)があるのも良いのではないか。例えば、傷病とのかかわりにおいて成立した曲とか、作曲者本人の傷病や生涯を契機に成立した曲、あるいは(それは音楽や芸術本来の役割ではないかもしれないけれど)音楽・楽曲と治癒的効果などを盛り込んだ、病院という場ならではのものも、プロであればこそ可能ではないか。そうしたことを通じて、若手芸術家の企画・提案力などを育む場にもできるのではないか。	病院側との打ち合わせの際、鑑賞者の平均年齢や、リクエストなどを伺うと(どの病院でも同様ですが)やはり「高齢者の方が多いので、懐かしい歌謡曲や、童謡、琵琶湖周航の歌」と言うリクエストが多くあります。視察いただいた友仁山崎病院にはモニターがあり、歌詞表示が可能だったため、特に「懐メロ」的な楽曲が多くなりましたが、普段はリクエストに応えつつも自身の聞かせたいクラシックの楽曲も盛り込んでいくように調整をしています。今後は、劇場に來られないお客様が劇場へ足を運んでいただくのと同様の本格的な音楽を聞けるというポイントも重要視しつつ、ホスピタルコンサートとしてバランスの良いプログラムを提案いただけるよう、奏者と十分に調整します。
このような場所でのコンサートだからこそ、地元で活動しているアーティストによる演奏の方が良かったのではないか。やはり、事前に一度は会場を訪れ、イメージを描いた上で準備を行う方が良いと思う。	全4会場ともに、第一候補は地元の音楽家でしたが、病院側の日程と奏者の都合により、友仁山崎病院での演奏会は甲賀市出身の奏者となりました。別会場の長浜は、長浜市出身のピアニストとソプラノ歌手に出演をいただくことができました。また、会場の状況に関しては、打ち合わせの時点で可能な限りの情報(写真や実際にお聞きした情報)を奏者に伝えるようにしました。

重点施策9: 文化活動の環境の整備

評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
今後、どのような医療、福祉施設にアウトリーチしていくのか、その条件や方向性を来場者にもPRしていくべきではないだろうか。口コミの力は大きいので。	医療機関にあっては、滋賀県病院協会と連携し、県内の病院(個人病院をのぞく)にアンケートをとってコンサートを希望される施設を基に開催エリアを考慮して選定しているところです。
癒しとケアが必要で、文化や芸術に触れられる余暇や隙間を求めているのは、患者や被介護者だけでなく、患者の家族をはじめとする看護者や介護者もそうであり、時には彼らにこそより切実にそれが必要とされ求められているかもしれない。そうした観点から例えばあえて看護者・介護者をターゲットとするような企画・構成もありうるのではないか。	一番に聞いていただきたいターゲットは患者や入所者のみなさんですが、特に限定しているわけではなく、会場ごとに協議して決めています。多くの場合、職員やご家族のみなさん、一般客にも広報活動を行っています。特に老人ホームなどはまでは、家族交流会と言うイベントの中で実施したため、入所者とだけでなく家族、職員のみなさまに演奏を聞いていただきました。
演奏によって患者・高齢者に癒しと慰めを与えることに加えて、「元気になる、退院し、あるいはその機会が来たら、今度はびわ湖ホールで、〇〇の会場でもう一度聞きたい・見たいな」、という目標や憧れ、その種を心に植え付けたり、そのように誘う工夫ができないか。一枚のパネル写真や旗印でも良いが、例えば、それがあつて、びわ湖ホール等劇場や舞台をほうふつとさせるような(能舞台鏡板の松のような、祭りの庭に立てられる御幣や櫛のような)シンボリックな、かつ持ち運びに簡便な、事業共通のしつらえのちょっとした小道具。そんなものがあると良い。	コンサートの始まりと終わりの挨拶は病院側にお願いをし、その際に簡単にホールの説明や財団の説明を入れていただいています。比較的元気な患者さんが対象の病院であれば「びわ湖ホールにお越し下さい」の一言も入れることは可能かと思われます。その他、パネルの設置などは実施会場側の都合を踏まえた上で検討します。
プログラムの選定が、病院ということでステレオタイプになっていなかったでしょうか。ご年配の方が多いから、歌謡曲、懐メロなのかということは再考すべきではないでしょうか。また、テレビ画面の字は少し小さく、字を追っていくことはご病気の方にはちょっとしんどかったと想像されるのですが。	病院側との打ち合わせの際、鑑賞者の平均年齢や、リクエストなどを伺うと(どの病院でも同様ですが)やはり「高齢者の方が多いので、懐かしい歌謡曲や、童謡、琵琶湖周航の歌」と言うリクエストが多くあります。視察いただいた友仁山崎病院にはモニターがあり、歌詞表示が可能だったため、特に「懐メロ」的な楽曲が多くなりましたが、普段はリクエストに応えつつも自身の聞かせたいクラシックの楽曲も盛り込んでいくように調整をしています。

総評

評価内容(改善すべき点)および質問事項	左記に対する対応等
<p>もっともっと実施回数と場所を増やし、拡げるべき。まだまだ少な過ぎる。</p>	<p>当財団では本事業の他に、学校巡回公演、ふれあい音楽教室、アートのじかん等の学校対象のアウトリーチ事業を行っています。一方、本事業では、今年度から滋賀県病院協会を通して広く県内の病院に募集をおこなったため、開催を見送った会場があるのも事実です。今後は病院側のニーズも取り入れながら検討します。</p>
<p>今回はたまたまクラシック音楽ではなく童謡や歌謡曲中心の選曲であったこと等もあって、「(「不幸な人や苦労している人などを)見舞って慰めること」という意味での)いわゆる「慰問」的な「におい」を感じた。「慰問」自体悪いことではなく、またあえて当事業を俎上にあげて議論すべきことかわからない。</p> <p>また当事業がそもそも「慰問」を目的とするものであるならこうした見方は的外れかもしれない。「慰問」の場で感じるような空気、すなわち、芸術家と芸術に触れるというよりは、演者、患者・入所者、介助者・スタッフ・主催者が三位一体となってつくる予定調和的な、安心に満ちた場や雰囲気味わえればそれでよく、それも必要だろうと思う反面、むしろ若手の人たちほど、こうしたイベント、あるいは高齢者や患者というものに対するステレオタイプなイメージにとらわれてしまっで惜しいことをしているところもあるのではないかと感じるし、ときに患者や入所者を「子どもあつかい」しているかのように見えることもある(今回イベントでのことではなく一般論として)。</p> <p>「この子らに世の光を」ではなく「この子らを世の光に」と言った糸賀一男の観点に立った時に、病院という場で(タテに主従あるサービスとしてではなくヨコに対等なホスピタリティとしての)ホスピタルコンサートとは、どのようなものであろうか。単に「慰問」を超えた、あるいは「慰問」の新しいかたちとしての事業になりうるか。以上のようなことについて、若い芸術家の方々と議論してみたいし、芸術家の方々同士や芸術家と病院・施設や患者・スタッフの間で議論されると面白いのではないかと思う。</p>	<p>先にも記載しましたが、事前の病院との打ち合わせで、どれだけ鑑賞者の情報を聞いてプログラムに反映、考慮させるかが重要だと思います。その中で、どうしても平均年齢が70～80代となるため、リクエスト曲も童謡や歌謡曲が中心とはなりますが、声楽であればクラシックの歌曲、音量で圧倒させるオペラ曲、楽器であればフルートのデュオなど、その楽器のために作曲された本格的なクラシック曲を選曲いただき、バラエティ豊かなプログラムを組んでいただいています。よって、年齢は意識して選曲はいただいています。特に病院・病人という意識はしていただいてはいないようには思います。</p> <p>また、約40分のコンサートをずっと聞いているだけではなく、手遊びやじゃんけんゲームなどを取り入れ、鑑賞者にも参加していただくプログラムを組んでいる回もあり、全4会場それぞれ異なった特色があります。患者さんのそれぞれの状態にもよりますが、比較的元気な方は職員さんと一緒に参加していただくことができました。</p> <p>今後は実施後に病院スタッフ、奏者からアンケートやご意見を聞き、それらを双方と当財団で共有し、今後の開催に活かしたいと思います。</p>
<p>演奏する曲の選定、演奏家の選定についてはしっかりと検討の上、決定し、実施すべきだと思う。限られた時間の中なので、100パーセントすべての方に満足していただくことは難しいとしても、「病院だから、病人だから」という思い込みを一旦リセットして考えるべきだと思う。</p> <p>入場者数の目標設定はどこから導き出されたのか。達成度175パーセントというのも手放しでよかったといえるのか。会場は病院内の、あの場所しかなかったのか。</p>	<p>演奏家は、声楽アンサンブルメンバー、ファーストリサイタル出演者から、協力開催地に縁の深い方を検討しています。</p> <p>また、曲目は会場の要望を踏まえつつ、アーティストの個性、感性も尊重し協議して決定しています。</p> <p>さらに入場者数の目標設定は、応募時点で病院側から申告のあった席数です。</p> <p>病院内の実施会場に関しては、病院と相談の上決定しているので、あの場所での開催を行いました。全会場ともに、応募の時点で会場の詳細を送っていただいております。滋賀県病院協会と協議の上で決定しています。</p> <p>その際に、広い会場かつ演奏環境が良いのももちろん重要な事項ですが、プロの演奏家を呼ぶ機会のない小規模な会場で開催することにもこの事業の意義はあると考え、今回の会場を選定した次第です。</p>